

〈論文〉

神殿・文明・社会

中央アンデス地域形成期の神殿からみた文明の 形成過程と社会の展開について

井口 欣也

はじめに

人類史における文明形成過程の研究は、文化人類学の重要な課題のひとつであり、この意味で古代文明はその格好の研究対象となる。しかしながら、古代文明の形成は過去に生じた最初で最後の一連のプロセスであるため、現在においてそれをはじめから順を追って観察することは不可能であり、なおかつそれにかかわった人びとと直接的に接して調査することもできない。さらに歴史資料による記録もない場合、その研究のためには、発掘調査を中心とする考古学的方法に資料収集の基盤を置くことになる。

南米古代アンデス文明の形成期研究における重要な考古学調査の対象に神殿がある。祭祀センターとも呼ばれる。これは、ある一定の地域社会によって運営されていた祭祀儀礼をおこなうための公共建造物であり、遺跡としても、一般の居住建築遺跡とはその構造、規模、付随する祭祀用品の遺物などによって明確に区別し得るものである。一般に神殿は、その建築構造の物理的な堅固さと、明らかに永続性を意図してつくられた遺物の存在ゆえに、遺跡としてよりよく保存されており、結果として比較的質の良い発掘資料を多く得ることが可能である。そのために形成期研究の調査対象として重要視されてきたことは事実であろう。この点で神殿遺跡の調査は、今日まで残り得なかったものは調査できない、という考古学的方法のもつ

制約と関係していることは否めない。しかし、中央アンデス地域形成期において神殿が有していた重要な役割を認めるならば、神殿研究はそれ自体が積極的な意味をもつことになる。

神殿とは字義どおりに言えば、まさに祭祀にかかわる活動が行われていた建造物である。実際に神殿遺跡からは、洗練された装飾が施された土器や装身具などの祭祀用品が出土することが多い。さらには神殿建築の石壁や漆喰の装飾、高度に様式化された図像を伴う石彫、そして特別な人物の埋葬とその副葬品などが出土する遺跡もある。

しかし、同時に中央アンデス地域形成期の神殿は、文明形成のプロセスと社会展開に密接な関係をもっていたと言える。形成期研究においては、常に神殿遺跡の調査と研究が重要な部分を占めてきたが、研究史上初期の個々の神殿遺跡や遺物の断片的な研究を経て、今日では徐々に広い範囲の具体的なかつ多角的な神殿に関する資料が蓄積されつつある。このような研究状況において、現在、より重要性を増しているのは、形成期の神殿遺跡を単なる祭祀活動の痕跡としてとらえるだけではなく、そこから神殿を支えていた社会のあり方や人間の具体的な活動を読みとり、また堅実な編年にもとづいてそれらの時期的変化を把握するという作業である。

本稿では、中央アンデス地域形成期の神殿が有していた多様な意味とその変化を、具体的な事例を検討しながら考察してみたいと思う。

1 文明の形成と神殿

古代アンデス文明は、現在のペルーほぼ全域とボリビア北部高地からなる中央アンデス地域に展開した(図1)。ここで形成期と呼ばれる時期は、文字どおり文明の基礎が形成され、その後この地に長く続く文化伝統と、社会・経済的基盤が確立した時代として位置づけられている。

一般的な形成期の指標としては、農耕や家畜を基盤とする生業体系の確立と定住村落の発達、土器製作の開始、神殿に代表される公共建造物の出現などが挙げられる。しかし、実際にはこれらの現象がすべて同時に始

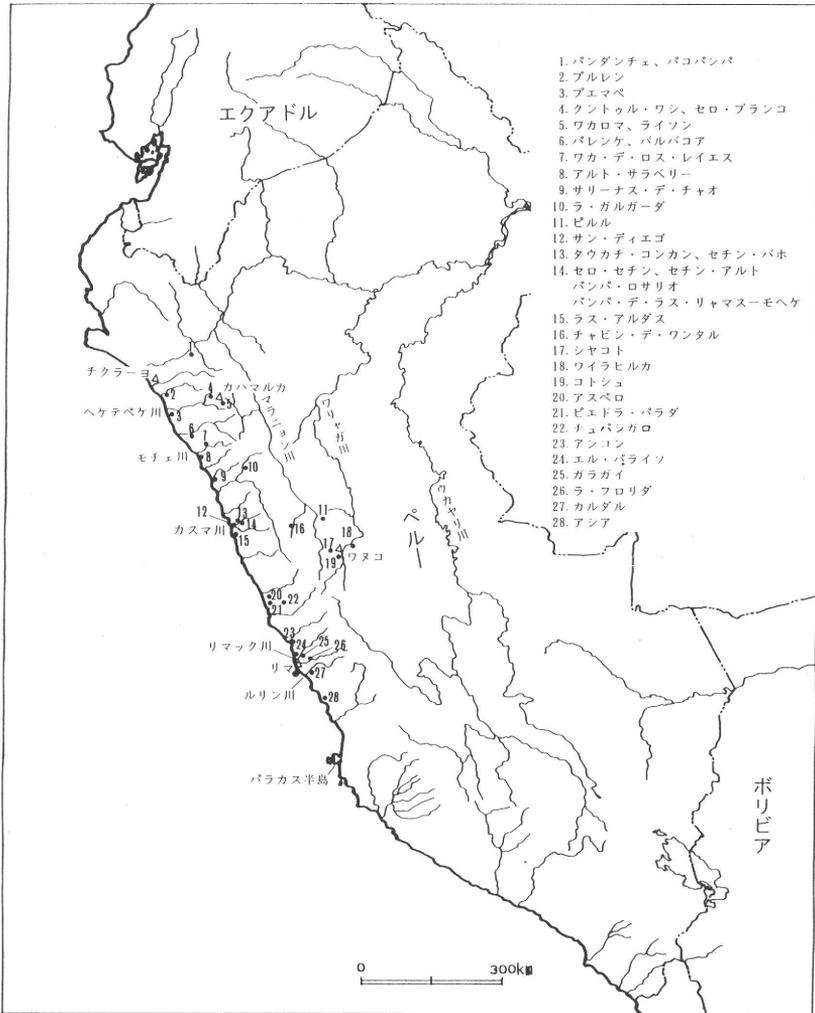


図1 本稿で言及する主な形成期遺跡

まったわけではない。言うまでもなく、農耕の成立は野生植物の栽培化に始まる長いプロセスのなかでとらえられるべきものであり、どの時点をもって農耕基盤の生業が成立したかを明確に決定するのは不可能である。

さらに形成期の海岸地域では、農耕とともに豊富な海産資源が食糧の重要な部分を占めていたことがわかっており、農耕のみが定住村落成立の必要条件であったとは言えない。また、土器が作物の調理や保存のために使用されたという点において、農耕の発達と深く関係していたことはたしかであるが、これも両者の同時発生の根拠としては不十分である。さらには、土器がつくられ始めるかなり以前の先土器時代から、祭祀建築はすでに建造されていたことが明らかになっている。したがって、これらいくつかの現象がセットとして同時に現れるという意味での形成期という時期区分の概念は、今日ではあまり重要な意味をもたないと考えられる。

一方、アンデス文明の形成において、特に神殿が果たした役割の大きさを考慮するならば、加藤（1993：40）が提示しているように、その出現をもって形成期のはじまりを設定することは、考古学上の年代区分として妥当な方法のひとつであると思われる。そこでまず、形成期において神殿が多様な意味を有していたということを、一般的な議論のなかで確認しておきたい。

形成期の神殿が有していた重要性は、まず第一に神殿のもつ公共建造物としての性質に起因する。公共建築たる神殿の建設やその維持にかかわる集団労働の必要性は、各地域内における社会統合の重要な契機となったはずである。また、神殿において祭祀活動に携わる神官の存在、祭祀用品などの製作に従事する熟練した専門職人の活動、そして神殿を建設するための大量の労働力動員など、神殿を取り巻く様々な営みを可能にするための前提条件は、これら食糧生産に直接かかわらない人々のために生活の糧を供給することである。この条件を満たすために、より効率的な生業のあり方が模索され、実現化されていったと考えられる。

また、集団統合のシンボルとしての神殿の有無は、その社会にとって決定的な違いとなる。サーリンズは「未開社会」の特徴として、「相互依存と共通の権威」がなく、したがってその社会の人口が増加しても、「膨張する共同体を一つにひきとめておく機構」が存在しないために、「分裂に

よって危機を実現し、同時に解消している」(サーリンズ1984:117-118)と述べている。また、そのような社会では、現有の技術で十分に生産可能なところに設定された必要最小限の経済的目標を達成することをめざすのみであり、このことが生産手段の発展を妨げているとも言う。この意味では、地域統合の象徴としての神殿を有していた中央アンデスの形成期社会は、サーリンズが言うところの「未開社会」の境界からは、確実に、そして大きく一步踏み出していると言ってよいだろう。そこでは神殿を取り巻く共同体が膨張すれば、分裂という方法を選択する前に、それに対応するだけの生産力の強化に努力が払われ、より集約的な農耕や、その他の効率的な食糧確保の方法が模索されたと考えられる。そして、より大きな規模の集団を統合する社会システムが整えられたであろう。要するに、神殿のもつ統合の象徴性が、共同体維持にかかわる社会組織の充実や経済力の強化につながったと考えられるのである。

神殿が多様な効果をもたらす第二の要因は、いわば「物質文化の洗練を極める場」としての神殿が有していた、文化と社会における牽引力としての性質である。より良い祭祀用品を創作する必要性が技術発展の努力を産みだし、また、近隣の地域では調達不可能な資源を遠隔地から獲得しようとする積極性を社会に与えたと考えられる。さらにこの時期、ある特定の領域内で共通した遺物上の様式や図像がみられるようになる。これは、一部の物質文化とそれに伴う技術や図像表現、そしてある場合にはそれらに表現されていた思想や宗教的イデオロギーが、各地の神殿をチャンネルとして伝達されていたことを示すものである。そして、これらによって生じたより広い範囲における物の流通と人的交流は、同時により実質的な経済と技術の交換へと道を開いたであろう。このように、神殿における洗練への志向が、形成期の文化と社会の展開のなかで大きな推進力としての役割を果たしていたと言えるのである。

2 中央アンデス地域の形成期と神殿

中央アンデス地域の文明形成過程，社会展開，経済発展において，神殿が重要かつ多様な意味をもっていたとの見通しは先に述べたとおりである。本稿では以下に具体的な事例を参照しながら，神殿の担っていた役割を三つの時期に分けて検討し，さらにそれが変化していく様相を浮き彫りにしてみたい。このため，形成期の神殿と社会展開における一般的な動きに照らし，ひとまず，1. 形成期初期（2500B.C.—1800B.C.），2. 形成期前・中期（1800B.C.—800B.C.），3. 形成期後期（800B.C.—250B.C.）という時期区分を設定する。なお，形成期末期（250B.C.—0）については，本稿では形成期後期との関連で補足的に述べるにとどめる。

（1）形成期初期（2500B.C.—1800B.C.）：文明と社会の推進力としての神殿

中央アンデス地域に最初の公共祭祀建造物が出現するのは先土器時代までさかのぼる。従来からよく用いられる編年では，先土器時代最後の先土器時代VI，あるいは海岸地域においてワタ栽培が普及した時期ということで，ワター先土器時代と呼ばれる時期に相当する（Lanning 1967 など）。絶対年代では2500B.C. から1800B.C. 頃である。この時期はまだ土器製作が始まっていないということで，従来の時期区分では形成期以前とされることが多かった。しかし，神殿と中央アンデス地域の文明形成のプロセスや社会展開との関係性を重視するならば，すでに述べたように，加藤の提案にしたがってこれを形成期の最初としてとらえることは意味のある時期区分であると思われる。無論，これは今日の形成期研究における一般的な時期区分の方法とは言い難い。しかし，既存研究においても，この時期は中央アンデスに大きな社会的転換が生じたとして「先土器時代後期」とし，それ以前の先土器時代からは切り離して，むしろ，従来の時期区分における「形成期初期（イニシャル期：1800B.C.—900B.C. ころ）」への流れのなかで議論されることが多かった。

この時期の祭祀センターは、その特徴から海岸地域と高地とに分けることができる。海岸地域では、豊富な海産資源を主たるタンパク源としながら農耕を生業に取り入れた定住村落が成立し、海辺に近い位置に祭祀センターが建設された。Williams は、この時期の海岸地域の建築様式の基本的な要素として、基壇構造、テラス状構造、円形半地下式広場、方形半地下式広場があるとしている (Williams 1980: 392)。これらの建築を要素を含む遺跡としては、モチェ谷のアルト・サラベリー、チャオ谷のサリーナス・デ・チャオ、スペ谷のアスペロ、チュバシガロ、ピエドラ・パラダなどがある。またその機能は不明なものの、チヨン谷のエル・パライスはおよそ58ヘクタールもの領域を占めるこの時期最大規模の遺跡である。前述した建築要素のほかにも、広くとられたオープンスペースや、小部屋状構造の集合による建築物の構成などが一般的特徴として挙げられる。

このうちアスペロでは、遺物とその出土状況から比較的具体的な祭祀行為を示すデータがある。ここでは建築を改築するために新しい床を古い床の上に張る際、その新旧の床の間に大量の木製品、バスケット、鳥の羽、土偶などの祭祀用品が埋められていた。また同遺跡では、新生児が織物に包まれ、500点にも及ぶ貝、石、骨などのビーズ玉とともに埋葬されていたことがわかった (Feldman 1985)。

一方高地では、建築様式にある共通の要素を有した祭祀建造物が建設された。ワヌコ盆地のコトシュ遺跡がその代表的な祭祀建築である (Izumi and Terada eds. 1972)。中央部が一段低くなる段差の床、中央の石組みの炉、壁が、粘土による漆喰などがその特徴である。Burgerはこの現象が、同様の建築構造を必要とした祭祀儀礼を共有する宗教イデオロギーの存在と、その広がりを反映していると考え、これを「コトシュ宗教伝統」と呼ぶことを提案した (Burger, R. and L. S. Burger 1980)。またこれらの遺跡では、前時期の祭祀建築を土中に埋めてその上に新たな建築をつくっていた。大貫は、このような「神殿の更新」と言える行為において、次により良いもの、より大きなものを生み出そうとする社会の営みが、この時

期の経済、技術、イデオロギーの発展と洗練をもたらしたと指摘している (Onuki 1994: 92)。この「神殿更新」は、シヤコト、ワイラヒルカ、ラ・ガルガーダ、ピルルにもみられ、それ以降の神殿の一部にも受け継がれた。

このなかで、ラ・ガルガーダでは独自の埋葬様式を有していた点で、他の高地の祭祀センターにはない特徴を示していると言える。ここでは、最初の時期の部屋状構造が次の時期の建築にとって代わられるとき、その部屋の一部を石で埋めると同時に残りを墓室として人物を埋葬していた。ここで発見された16の埋葬のうち、半分の8例がこのタイプの埋葬であった (Grieder et al 1988: 59-67)。

ワヌコ盆地では、盆地内の広範な調査によってこの時期の遺跡分布が把握されている。先土器時代のミト期 (2000B.C.—1500B.C.) から土器製作が始まるワイラヒルカ期 (1500B.C.—1000B.C.) を経て、コトシュ期 (1000B.C.—700B.C.) に至るまでは、コトシュ、シヤコト、ワイラヒルカ、ワランパイロマなどのセンターが、半径5キロメートルの範囲で併存していた。これらはそれぞれが独自の儀礼場をもっていたのである。大貫はこれらが互いに競合関係にありながらも、同時に相互補完的な関係にあったのではないかと想定している (Onuki 1994: 84)。

中央海岸地域のアンコンでは、海岸に近い河谷で生産可能な作物とともに、高地で栽培されるジャガイモ、オカ、オユコが出土している (Quilter and Stocker 1983: 554)。このような事例はこの時期の他の海岸地域遺跡にはほとんどみられないので、これをもって海岸と高地とのあいだに恒常的な交換関係が成立していたことを示す根拠とするのは性急である。しかし、少なくともある限られた領域において、海岸と高地を結ぶネットワークが形成され始めたことは確かであろう。そしてここで注目すべきは、このネットワークが、むしろ経済的必然性を伴わない貴重品の長距離交易を契機としていたのではないかと考えられる点である。実際、海岸地域のアスベロ、アンコン、アジアなどでは、高地の黒曜石が出ている。さらに北方エクアドル産の貝であるスポンディルスは、中央海岸地域のア

スベロ、エル・パライスから出土しているのである。

この時期、海岸部では豊富な海産資源と農耕、そして高地では農耕を主たる基盤として定住の村落共同体が成立していた。センターの規模から考えて、海岸地域の抱える人口の方が大きかったようである。集権的な政治権力の存在や社会階層化を裏付ける明確な証拠はないが、少なくとも海岸地域の大祭祀センターでは、その建設のために大量の労働力を動員していたことは明らかである。これは、当時の生業にかかわる集団労働のレベルをはるかに越える大事業であったと考えられる。そしてこのような祭祀センター建設にかかわる労働力の組織それ自体が、社会の組織とシステムの充実に刺激を与えたことはたしかであろう。

一方、高地にはある種のイデオロギーを共有する伝統が、一定の領域で広がっていたとする Burger の仮説は全面的には肯定できない。建築の様式において明らかに共通の要素がみられるのは確かだが、そのような物質文化の類似性のみをもって、同じ「宗教伝統」の根拠とするのは少々短絡的である。また、たとえばラ・ガルガータのみに特殊な埋葬の様式があったように、祭祀活動実践の細部には、ある程度の差異があったと考えたほうがよい。一方、大貫はこの祭祀建築における様式上の広がり、環境区分上ユンガと呼ばれる地域の生業体系を有する社会が、ユンガを基盤としつつも他の環境帯を含めた地域へと展開していったことと関連しているのではないかと示唆している(大貫 1992: 5-6)。このことに注目すれば、この共通した神殿建築様式の広がり、単なるイデオロギー伝播の結果としてではなく、生業システムの確立と新環境の開拓、そして神殿の充実とその広がりとの相互作用の中でとらえることができる。社会の生業と祭祀を支えるイデオロギーはその根底で密接に結びついており、両者がより広い地域にその基盤を確立していくうえで、様々な相乗効果を生みだしたと考えられる。

(2) 形成期前・中期 (1800B.C.—800B.C.): 洗練と大規模化への志向

形成期前・中期の海岸地域のセンターにおける特徴をあえて抽象的に表現すれば、祭祀にかかわる物質文化のきわめて高度な洗練と、神殿建築の大規模化を挙げることができよう。

この時期、ペルー北海岸地域においてはクピスニケと呼ばれる文化が繁栄した。Larco Hoyle は1930年代にチカマ河中流域のパレンケ、バルバコアなどの遺跡を調査し、形成期の多くの墓と副葬品を発見した。もともとクピスニケという概念は、これらの副葬品が有していた特徴的な様式や図像に対して命名されたものである (Larco Hoyle 1941)。しかし今日では、形成期の祭祀建築や土器、金製品、石製品などの洗練において先行的な役割を果たした文化複合としてとらえられることが多い (Elera 1994 など)。

ペルー北海岸の町パカスマヨに近い海辺のプエマペ遺跡の調査では、石造の基壇構造の一部が確認されたと同時に、ある時期を境にして埋葬の方法と副葬品が急速に洗練されていく過程が明らかになっている。ここでは多数の墓が発見されており、クピスニケの埋葬方法や副葬品の時期ごとの変化が観察できる数少ない遺跡である。最初の時期につくられた墓は24基を数えるが、目立った副葬品はなく、墓穴も浅かった。ところが第二時期目になると、墓穴は平均して深さ1.5メートルほど掘りこまれるようになる。また副葬品も、いわゆるクピスニケ様式の精製土器や石玉、エクアドル産のスポンディルス貝などが出てくるようになる。この第二時期のものとしては40にも及ぶ埋葬が発見されている (Elera 1994: 241-243)。

クピスニケの領域における代表的な公共建造物としては、総面積が200ヘクタールにも及ぶ、モチェ谷の大規模な基壇複合遺跡のカバヨ・ムエルトが挙げられる。そのなかのワカ・デ・ロス・レイエスでは集中的調査が行われており、複数の時期にわたって公共建築の建設が行われていたことがわかった (Pozorski, T. 1976, Conklin 1985)。この祭祀センターは、複数の方形半地下式広場のそれぞれが、三方を基壇建築によって囲まれるという構造になっている。基壇の壁の一部には、ジャガー的な牙をもった巨大な人物の顔をモチーフとした土製レリーフ像が残っていた。

モチェ谷より北のサーニャ谷海岸部に位置するプルレンも、15のマウンドを含む大規模な建築複合である (Alva 1988)。このなかのひとつのマウンドの調査では、方形半地下式広場と段状の基壇構造を組み合わせた建築が明らかになっている。

また、中央アンデスにおける金製品の伝統は形成期に始まるが、その洗練の中心にあったのもクピスニケであった。1992年に刊行された『古代ペルーの金製品』(de Lavalle 1992)には、形成期のものとされている金製品が60点近く収録されているが、この中のおよそ9割が、北海岸地域を中心とするクピスニケの領域で発見されたものとされている。

クピスニケの領域より南に位置するカスマ谷の海岸地域は、複数の大規模な祭祀センターが建設された点で異彩を放っている。そのなかでも最大規模の建築複合を有するセチン・アルト、特殊な石彫を用いた建築が特徴的なセロ・セチン、そのほかパンパ・デ・ラス・リヤマスーモヘケ、タウカチ・コンカン、そしてこれらよりやや南に離れて、先土器時代からの活動が確認されているラス・アルダスなどがある。調査者の Pozorski は、これらのセンター群を二つの政体に分けることができると想定している。一つはセチン・アルトが、そしてもう一方はパンパ・デ・ラス・リヤマスーモヘケがその中心であったという。各政体は複数のセンターを有し、それらは祭祀的機能をもつものと世俗的機能をもつものとに分類できると考えている。先に述べた二つの中心となるセンターは、建築における土製レリーフ像に示唆されるように祭祀的機能が強い一方で、セチン・バホとワカAは、中央通路によって二分された規則的な部屋の構造を有していることから、それぞれがセチン・アルト、パンパ・デ・ラス・リヤマスーモヘケの政体の中で世俗的役割を担ったセンターであったというのである。また植物遺物や土器、建築様式の類似性から、パンパ・デ・ラス・リヤマスーモヘケはやや北の海辺のトルトゥガスと、セチン・アルトはラス・アルダスとの相互関係が重要であったのではないかとしている (Pozorski, S. and T. Pozorski 1987: 114-116)。

カスマ谷のさらに南方の中央海岸地域にはアンコン、ガラガイ、ラ・フロリダ、カルダル、ミナ・ペルディダなどの大規模なセンターがあった。

ここで注目すべきは、海岸地域の公共建築遺跡の分布状況とその解釈に関する論点である。Burger は、一つの谷の海岸部において比較的近距离の範囲に複数のセンターが存在すること、またこの時期の小規模な灌漑設備はそれほど大きな政治組織を必要とせず、したがって基本的にはそれぞれの地域的な社会集団によって建設され使われていたとの解釈を加えている (Burger 1992: 70-71)。その一方で Pozorski は、先に述べたカスマ谷での仮説をさらに展開し、この時期にモチェ、カスマ、スペ、チヨンーリマックなど、比較的広い範囲を統合する政体の存在を想定している (Pozorski, T. and S. Pozorski 1987: 43-44)。また、先土器時代までの祭祀センターが比較的海岸に近い地域に立地していたのに対し、この時期はやや内陸の平野部へ建設される傾向へと変化したのは、灌漑農耕の本格化にともなう水の管理体制と関係があるとも指摘している (Pozorski, S. and T. Pozorski 1979: 429)。両者の相反する見解は、現時点の考古学的根拠からすれば、Burger にやや分があるのではないかというのが筆者の見解である。Pozorski の政体による地域区分は、たしかに遺物や建築の様式における類似性を基準とする区分としては妥当であると思われるが、それぞれのまとまりを政体と呼ぶにはまだ根拠が不十分だと思われる。

しかし、一方で Pozorski の指摘する灌漑用水管理と祭祀センター立地の関係は注目に値する。灌漑水路の建設には、それがたとえ大規模なものでなくとも、相当量の人員からなる組織された労働力が必要であったはずである。またオートロフは、形成期以降の中央アンデス地域の灌漑用水路に関して、それが常に十分な機能を果たすためには逐次維持と改修のための工事が不可欠であったことを指摘している (オートロフ 1989) が、これは当然形成期の灌漑にも当てはまることであろう。このような灌漑農耕に必要な継続的労働力が組織されるにあたり、それ以前から存在していた祭祀センターの建設と維持に携わる集団組織のシステムが重要な役割を

果たしていた可能性は高い。

一方、高地でもあらたな祭祀建築の成立があった。日本調査団の徹底した調査により解明が進んでいるカハマルカ盆地のワカロマでは、前期ワカロマ期 (1500B.C.—1000B.C.) と呼ばれる時期に最初の土器が導入され、この盆地に最初の祭祀建築が建設されている (Terada and Onuki 1982, 1985)。土器にはまだ装飾的要素は少ないが、類似した様式の土器を有するセンターとしては、ヘケテベケ河支流のセロ・ブランコ、同河川中流部のモンテグランデ、カハマルカ北部のパンダンチェなどがある。ワカロマでは次の後期ワカロマ期 (1000B.C.—500B.C.) になると、神殿の規模が飛躍的に大規模化し、装飾をともなった精製土器も増える。この時期の遺跡としてパンダンチェ、セロ・ブランコのほか、大がかりな祭祀建築を伴うものにパコパンパ、クントウル・ワシなどがある。一方ワヌコ盆地でも土器を伴う時期に移行し、コトシュ、シヤコト、ワイラヒルカが機能し続けていた。

(3) 形成期後期 (800B.C.—250B.C.) : 政治センターの萌芽としての 神殿

大貫は海岸諸遺跡の絶対年代資料から、形成期中期まで北・中部海岸地域に繁栄していた祭祀センターのほとんどが、800B.C.から700B.C.頃までに放棄されたと考えられ、さらにその後200B.C.頃まで海岸地域に大規模な公共建造物の証拠がほとんどみられなくなることを指摘し、この時期を「海岸空白 (blanco costeño)」と呼んでいる (Onuki 1994: 90-91)。これは前述したクピスニケ様式を有する領域、カスマ谷海岸部の祭祀センター群、そして中央海岸部のいずれにも共通する動きであった。この現象は、海岸地域が何らかの自然災害を被ったことが要因となったのではないかということが、クピスニケ領域のプエマペ、モロ・デ・エテン (Elera 1994: 246, 249)、カスマ谷 (Pozorski, S. and T. Pozorski 1987: 127) の調査者によって指摘されている。

カスマ谷では、その放棄の様相がやや具体的にわかっている。ラス・アルダスとパンパ・デ・ラス・リヤマスの建築物は、建設途中で放棄されており (Pozorski, S. and T. Pozorski 1987: 117-118), 何らかの外圧によりやむを得ず作業が中断されたことを示唆している。またセロ・セチンにみられる戦闘をテーマにした図像は、そこにみられる敗者の着ている服のスタイルから、形成期初期のカスマ谷の政体が侵略を受け、征服された様子を記念碑的に残したとする説もある (S. Pozorski 1987: 27)。さらにカスマ谷では、前時期の祭祀センター群が放棄されたあとに、パンパ・ロサリオ、サン・ディエゴの建設にみられるように、祭祀的要素の少ない新しい大居住地の建設があった。

海岸地域の祭祀センターが放棄された時期に、逆に高地では、土器などの遺物に海岸的要素が現れたり、新しい祭祀センターが建設されるという動きがあった。とくにクピスニケ様式の拡散は広い範囲に及んでいる。北部高地クントウル・ワシでも、第二時期目のクントウル・ワシ期 (700B.C.—450B.C.) に大きな変化が生じた (Onuki ed. 1995)。このとき、それ以前の時期の建築が破壊、もしくは埋められたうえで、新たに大規模な神殿建築複合がつくられたのである。土器も、実用土器以外の精製土器については一変し、クピスニケ様式が優勢となる。この時期の最初に埋葬された墓からは、北海岸地域から直接持ち込まれたと思われる金製品や土器の副葬品が出土した (大貫・加藤 1991)。また、クントウル・ワシから距離にして北東わずか1.5キロの位置にあるセロ・ブランコは、それ以前まではクントウル・ワシ神殿とともに共存していたが、この時期にクントウル・ワシにおいて起こった革新と同時にその機能を停止してしまう。クピスニケ様式の土器や図像の拡散はこのほかにも、北中部高地のチャビン・デ・ワントル (Lumbreras 1993)、海岸地域においても先述したカスマ谷の新居住地パンパ・ロサリオ (Pozorski, S. and T. Pozorski 1987: Fig.45), さらに南部海岸地域に新たに生まれたパラカス文化の領域にもみられる。

ワヌコ盆地ではコトシュ・チャビン期 (700B.C.—250B.C.) に、前時期までのセンターのうち、コトシュ以外は放棄されてしまう。存在が維持されたコトシュでも、大幅に改築が行われている。さらに新しいセンターがパウカルバンバ、サハラパタなどに成立する。調査者の大貫は、おそらく前時期までの祭祀センターのうちもっとも強い力をもっていたシヤコトが破壊されて、チャビン・デ・ワンタルの新しい儀礼コンセプトがコトシュに導入されたのであろうとの見通しを立てている (Onuki 1994: 85)。

クントウル・ワシの革新とセロ・ブランコの放棄、そしてワヌコ盆地内の各センターの変化という二つの事例は、新たな理念のもとに再建または新築された神殿が、それまでの神殿の一部の存在を否定したことを示していると考えられる。この点において、これらの新神殿はその領域を明確化し、排他性を強めていったと言えるのではないだろうか。とすれば、この時期の神殿は、その祭祀的機能とともに、より政治的機能と統合力を強めていったと言えそうである。

形成期の大神殿遺跡チャビン・デ・ワンタルも、ほぼこの時期の最初、すなわち海岸地域の祭祀センター群放棄とおおよそ時を同じくして成立したものと考えられる。実際、土器の装飾には形成期前・中期のクピスニケや中央海岸の様式がみられる。チャビン・デ・ワンタルについては、そのオフレンジス回廊にみられるような建築構造の複雑さ、高度に様式化された図像が表現された百数十点にも及ぶ石彫の数々、大量の祭祀土器などの存在から、完成度の高い祭祀空間としての性質が際だが、その政治的統合力を示すものは何だろうか。

かつて、チャビン・デ・ワンタルは、その建築と遺物の卓越性から、ペルー各地に強い影響力をもった中心として位置づけられた (Tello 1943, Carrión Cachot 1948など)。その後の調査と研究により、逆に、多くの遺跡においてチャビン・デ・ワンタルに対する年代的先行性を示すデータが集まりはじめ、形成期文化の起源を説明するという意味でのチャビン論は意味を失ったと言える。しかし、起源や伝播という視点からひとまず離れ、

これだけ大量の洗練された遺物を有する巨大な神殿をつくりあげる能力を有していた社会とはいかなるものだったのかを考察することは重要である。Lumbreras は、チャビン・デ・ワンタル神殿の完成は、大量の労働力とそれを動員するだけの権力、洗練された大量の祭祀土器や石彫を完成させた職人と祭祀儀礼にかかわった神官などの専門職の存在、そしてこれらの活動を保証する生産力を有していた社会の存在を示すものだとし、それは中央アンデスにおいて「国家」社会の萌芽として位置づけられるとしている (Lumbreras 1993: 370)。

この時期の後半においては、生業体系においても重要な転換がみられる。カスマ谷の植物遺物の資料によれば、パンパ・ロサリオ、サン・ディエゴでは、それまでこの地域にはなかったトウモロコシが導入されていることがわかっている (Pozorski, S. and T. Pozorski 1987: 119)。クントウル・ワシでも、コパ期 (450B.C.—250B.C.) の人骨分析から、トウモロコシの摂取が増えたとする中間報告がある (関 1995: 71)。このトウモロコシの導入が、形成期末期の社会の内的結束や外部との連合を図るためのチチャ (トウモロコシの酒で、儀礼で使われたり共同体の労働において振る舞われる) づくりの必要性と結びついているとする関 (1995) の仮説を受け入れ、その可能性をややさかのぼって形成期後期において考えれば、カスマ谷のこの変化は、共同体のセンターがより政治的統合力を強めた結果であったことの傍証ともなる。さらにパンパ・ロサリオでは、魚介類を中心としながらも、あらたにラクダ科動物とクイを動物タンパク源として導入したことがわかっている (Pozorski, S. and T. Pozorski 1987: 70)。ラクダ科動物利用の増大は、高地のコトシュとワカロマでは、鹿との相対比でみた場合、それ以前の鹿が多数を占める状態から両者の拮抗、そしてラクダ科動物の鹿に対する逆転へという、より顕著な変化として現れている。コトシュでは、鹿がラクダ科動物に対して圧倒的に多いのがワイラヒルカ期 (1500B.C.—1000B.C.) まで、ラクダ科動物が増大して鹿と拮抗するのがコトシュ期 (1000B.C.—700B.C.)、チャビン期 (700B.C.—250B.C.)、およ

びサハラパタ期 (250B.C.—1 A.D.), そしてラクダ科動物が鹿を大きく上回るのがイゲーラス期 (1 A.D.—) である (Wing 1972: 333)。同じくワカロマでは、後期ワカロマ期までが鹿, EL 期 (550B.C.—250B.C.) が拮抗, ラyson 期 (250B.C.—50B.C.) でラクダ科動物の逆転となる (Shimada 1985)。チャビン・デ・ワンタル神殿周辺の村落においては、最初のウラバリウ・フェイズ (900B.C.—500B.C.) からラクダ科動物が鹿を上回っており、つづくチャキナニ・フェイズ (500B.C.—400B.C.) からハナバリウ・フェイズ (400B.C.—200B.C.) にかけて、その差はより広がっている (Miller and Burger 1995: 428-429)。これらの資料が示すラクダ科動物の家畜化増大は、その食用としての利用だけでなく、この時期の長距離交換を容易にした運搬用動物としての必要性の高まりも示しているとも考えられる (Miller and Burger 1995)。

トウモロコシの導入や動物家畜化の増大が示すこの時期の生業体系の転換は、祭祀センターの統合力の強化と、その社会が利用した環境帯の広がりを示していると考えられる。

資料が限定されているので一般的傾向としては明言できないが、高地ではこの時期に、海岸地域の強い影響による土器の導入からやや時間を置き、各センターを中心に独自の祭祀土器が生産され始めたようである。クントウル・ワシのコパ期は、この変化が明確に現れている (Inokuchi 1995)。同様の土器の変化は、ワカロマのEL期、コトシュのチャビン期後半にもみられる (Onuki 1994: 91)。

以上にみられた地域社会における神殿の統一化、新神殿の建設、それに伴う生産力強化への動きなどが示すように、この時期の神殿は政治的統合力のセンターとしての性質を強めていく傾向にあった。この点で、神殿とそれを内包する社会の質的变化が生じたと言える。

3 考察

中央アンデスの形成期研究の歴史を顧みると、その最初にあった問題意

識は、先住民文化としてのアンデス文明の起源に対する強い関心であったと言える。そこから、チャビン・デ・ワンタル遺跡のような高度に洗練された遺物や建築を有する遺跡がその母胎とみなされ、この神殿の影響がいかに強い力をもって各地に伝播していったかが問題の中心となった。そこから、伝播の指標として、共通の「チャビン・スタイル」に関する様式の分類や編年が行われた。このような研究史上初期の蓄積もあり、形成期社会は強力な政治権力による統合や地域集団間の闘争などを志向しない、社会のいわば「非国家的な展開」、そして宗教的イデオロギーによる緩やかな統合という点が、かつては強調される傾向にあったと思われる。しかしこれまで概観してきたように、形成期の神殿は祭祀によって社会を統合するという本来的な役割だけでなく、同時に、社会システムと経済の発展に刺激を与える力を必然的に内包していたと言える。実際、本稿でみたように形成期の神殿は、時期を追って政治的統合のセンターとしての、あるいは宗教と政治の機能が統合されたセンターとしての役割を増していくことがわかる。

ここで大きな転換点として注目したいのは本稿における第三時期目、すなわち形成期後期の変化である。この時期における海岸地域のセンターの放棄とそれに伴う高地の祭祀センター革新という現象は、海岸地域が天災によって被害を受け、それに伴いそれまでの海岸地域の宗教イデオロギーが崩壊した結果だとする指摘がある。Burgerはこれによって、あらたに高地のチャビン・デ・ワンタルを中心とする宗教イデオロギーが、各地に広まる下地を獲得したとする「チャビン・ホライズン論」を一貫して展開している(Burger 1988 など)。しかしこの説明は、本当に妥当と言えるのだろうか。

すでにみたように、北海岸地域の祭祀センター放棄後、クピスニケ様式の拡散は広い範囲でみられた。クピスニケ様式を支えた宗教イデオロギーの権威失墜があったとすれば、祭祀の重要な部分にかかわるこれらの物質文化は、むしろ否定されてもよかったと思われる。また、先述したクン

トゥル・ワシのクピスニケ様式の副葬品を伴う埋葬行為は、北海岸地域の祭祀活動が、高地に場所を移して実践された痕跡としてとらえられるのではないかというのが筆者の見解である。したがってこの時期の大きな動きは、むしろ北海岸地域の共同体が天災を契機として、より統合力の強い共同体形成へ、またより抵抗力の強い社会システムの構築へと動き始め、高地にその活動の場を移動していったという、積極的な社会展開であったと位置づけられる可能性も考えてよいのではないだろうか。

もともと形成期初期までの海岸地域は、豊富な海産資源と発達した農耕を背景に、高地に比べて大量の人口を養ってきた。そうした規模の社会が高地に進出した結果、第三時期目に高地の各地で起こった急激な展開、すなわち海岸の様式の遺物の流入、祭祀センターの統合化と完成度の高い新たな祭祀センターの建設、新しい生業体系の導入などの現象が起こったのではないだろうか。これらの現象は、高地の内的な社会展開の結果、あるいは一部の祭祀品と人間の流入、およびそれらの影響ということだけで説明はできないと考えられる。むしろ統合への新しい展開をみせる、まさにその最初にあった海岸地域の社会再構築に、高地の共同体が巻き込まれていったと解釈したい。そして天災という困難を乗り越え社会を再構築する原動力となったのは、神殿を統合のシンボルとして組織されていた社会システムであり、それゆえに高地の新天地においても、社会の統合性を象徴する公共建築物を建設する必要があった。ただし、以上の仮説的見通しを検証するには、まだ一次資料が十分とは言えない。とくに中央海岸地域社会が、その祭祀センター放棄後にどのように展開していったのかについては、まだわからないことが多い。

大貫は、形成期中期に起こった気候変動を契機としてトウモロコシ栽培の重要性が増し、これが新しい環境の開拓とイデオロギーの変革をもたらしたと指摘している。これに伴い社会組織や共同体の再分配システムが充実し、形成期の後期には集団労働の形態においても、より強制力の強いミタ制度が成立していたのではないかと指摘している (Onuki 1982:

222-223, 大貫 1992: 14-15)。これは形成期中期から後期にかけて生じた気候、環境利用、生業体系の変化と社会統合の強化を関連づける重要な視点である。大貫はこの新展開の主体を、おもに山間ユンガの住民にみているのだが、この時期の海岸地域放棄や北海岸クピスニケ様式の遺物の拡散とあわせて考えれば、同様の新環境開拓という動きは、海岸地域の住民についても当てはまることではないだろうか。

また、関は具体的なカハマルカ盆地の資料を根拠として、本稿での第三時期目（形成期後期）より後、形成期末期のライソン期（250B.C.—50B.C.）のセンターとしての建造物が、外部社会に対する関係を重視した配置に変化すること、また同じ時期に海岸地域の一部では城塞型の遺跡がみられるようになることを、大きな社会的転換としてとらえようとしている（Seki 1994, 関 1995）。この点を考慮すれば、形成期後期に強まった祭祀センターの政治的機能の増大は、形成期末期にはさらにこの傾向を強め、共同体の有する「センター」自体の性質が変容していったということを想定することができる。

また、カスマ谷の研究で Pozorski が指摘しているように、形成期における地域間の戦闘や侵略の具体的な様相は今後さらに検討されてよい問題である。現時点の資料だけでは、Pozorski の想定するカスマ谷海岸地域の征服という現象が、実際にあったのかどうかは判断できない。しかし、海岸地域のセンター放棄という現象のすべてが、先に筆者が仮説的に述べたように、海岸地域の人々による主体的な撤退の結果であったのか、あるいは高地を中心とする外部の人間による海岸地域への侵略行為によるものだったのかという問題は、祭祀センターのその後における政治的統合力強化の動きとの関連で、今後視野に入れるべき問題である。

しかしその一方で、先土器時代における最初の神殿出現、そしてその後の神殿にかかわる洗練と大規模化への志向とも言える現象は、それを政治的統合の結果、あるいは経済力強化の産物とすることだけで説明のつくものではない。この点では、形成期のはじめに起こった祭祀をめぐる活動の

肥大化とも言える現象が、中央アンデス地域の文明と社会の形成において、むしろ牽引力として大きな意味をもっていたという見通しは重要な視点であると考えられる。実際、この時期の神殿には、当時の経済力のレベルをはるかに超えると考えられる労働力の動員、経済的交換に先立つ貴重品の長距離交易などがみられた。このような神殿を中心に展開された祭祀充実のための様々な営みが、社会システムの充実とその再生産、そしてより大きな経済力を生み出したと考えられるのである。

おわりに

アメリカ大陸先住民の民族誌資料から、政治と権力の問題について数々の論考を発表したクラストルが指摘するには、強制としての政治権力は真の権力として唯一のモデルではなく、むしろ西欧という限られた地域にみられる一つの特例ケースであるという。そして、政治権力は人間社会に必然的に内在しており、それには強制的権力と非強制的権力という二つの現実化の様式があると述べ、後者の例をおもに南アメリカ先住民の社会にみている（クラストル 1987：26-27）。形成期の最初に達成された祭祀センターをみれば、そこにはこの「非強制的権力」の存在を強く意識せざるを得ない。

それでは、アンデス形成期の始まりにおいてクラストルの言う広義の「政治権力」の基礎にあったものは何であったのだろうか。現時点でこれを明確に論ずることは困難であるが、本稿で具体的にみてきたように、祭祀をめぐる活動とその中心にあった神殿の建設と維持、そして神殿にかかわる様々な洗練の営みが、その力の源泉と深く関係していたということはたしかである。

中央アンデス地域における文明形成のプロセスと社会展開が、世界の中でどの程度の特異性をもちうるのかを論ずるのは、膨大な事例の具体的検討を要するものであるが、本稿でみてきたような、神殿を中心とするその展開の事例は、文明形成過程の多様性にかかわる研究にひとつの相対的な

視点を提供するものであると考えられる。

その一方で、文明形成過程のまさに始まりにおいて、祭祀などのように文化の一側面にかかわる活動が、当時の社会・経済的レベルからすると異常なまでに洗練されていくことによって、逆に社会の様々なシステムの充実と経済活動の発展をもたらすということは、アンデス地域に限らず広く一般的にみられる現象ではないか、ということが筆者の漠然とした見通しである。サーリンズの言う「未開」の閉塞状態を打破し、社会と経済の発展的な再生産への道のりを開く際に、祭祀、儀礼、物質文化などの充実をめざす人々の活動が果たした役割は非常に大きかったと考えられる。この点では、中央アンデス地域形成期の事例は、その特殊性と同時に文明形成の普遍的な一面を具体的に示すとも言えるのである。

参考文献

Alva, Walter L.

- 1988 "Investigaciones en el Complejo Formativo con Arquitectura Monumental de Purulén, Costa Norte del Perú (Informe Preliminar)." *Beiträge zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie* 8 (1986): 283-300. Kommission für Allgemeine und Vergleichende Archäologie des Deutschen Archäologischen Instituts Bonn.

Burger, Richard L.

- 1988 "Unity and Heterogeneity within the Chavín Horizon," in Keatinge, Richard (ed.), *Peruvian Prehistory*: 99-144. Cambridge: Cambridge University Press.

- 1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. London: Thames and Hudson Ltd.

Burger, Richard L. and Lucy Salazar Burger.

- 1980 "Ritual and Religion at Huaricoto." *Archaeology* 33: 26-32.

Carrión Cachot, R.

- 1948 "La Cultura Chavín: Dos Nuevas Colonias: Kuntur Wasi y Ancón." *Revista del Museo Nacional* 2 (1): 99-172.

クラストル, ピエール(渡辺公三訳)

- 1987 『国家に抗する社会:政治人類学研究』東京:書肆風の薔薇.

Conklin, William J.

- 1985 "The Architecture of Huaca Los Reyes," in Donnan, Christopher B. (ed.), *Early Ceremonial Architecture in the Andes*: 139-164. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Elera, Carlos G.
 1994 "El Complejo Cultural Cupisnique: Antecedentes y Desarrollo de su Ideología Religiosa." In Millones, Luis y Yoshio Onuki (eds.), *El Mundo Ceremonial Andino*: 225-252. Lima: Editorial Horizonte.
- Feldman, Robert A.
 1985 "Preceramic Corporate Architecture: Evidence for the Development of Non-Egalitarian Social Systems in Peru," in Donnan, Christopher B. (ed.), *Early Ceremonial Architecture in the Andes*: 71-92. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Grieder, Terence, Alberto Bueno M., C. Earle Smith, Jr., and Robert M. Malina.
 1988 *La Galgada, Peru: A Preceramic Culture in Transition*. Austin: University of Texas Press.
- Inokuchi, Kinya
 1995 "La Cerámica de Kuntur Wasi," in Onuki, Yoshio (ed.) *Kuntur Wasi y Cerro Blanco: Dos Sitios del Formativo en el Norte del Perú*: 23-45. Tokio: Hokusen-sha.
- Izumi, Seiichi and Kazuo Terada (eds).
 1972 *Andes 4. Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 加藤泰建
 1993 「アンデス形成期の祭祀建築」『民族藝術』第9巻：37-48.
- Lanning, Edward P.
 1967 *Peru before the Incas*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs.
- Larco Hoyle, Rafael.
 1941 *Los Cupisniques*. Lima: Casa Editora "La Crónica y Variedades".
- de Lavalley, José Antonio (ed).
 1992 *Colección Arte y Tesoros del Perú: Oro del Antiguo Perú*. Lima: Banco de Crédito del Perú.
- Lumbreras, Luis Guillermo.
 1993 *Chaún de Huántar: Excavaciones en la Galería de las Ofrendas*. Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie. Band 51. Mainz: Verlag Philipp von Zabern.
- Miller, George R. and Richard L. Burger.

- 1995 “Our Father the Cayman, Our Dinner the Llama: Animal Utilization at Chavin de Huántar, Perú.” *American Antiquity*, 60(3): 421-458.
- Onuki, Yoshio.
- 1982 “Una Perspectiva Prehistórica de la Utilización Ambiental en la Sierra Nor-Central de los Andes Centrales.” In Millones, Luis y Hiroyasu Tomoeda (eds.), *El Hombre y su Ambiente en los Andes Centrales*. Senri Ethnological Studies 10: 211-228. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1994 “Las Actividades Ceremoniales Tempranas en la Cuenca del Alto Huallaga y Algunos Problemas Generales.” In Millones, Luis y Yoshio Onuki (eds.), *El Mundo Ceremonial Andino*. 71-95. Lima: Editorial Horizonte.
- Onuki, Yoshio (ed.)
- 1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco: Dos Sitios del Formativo en el Norte del Perú*. Tokio: Hokusen-sha.
- 大貫良夫
- 1992 「中央アンデス先史時代の環境と文化の相互関係のプロセス」東京大学教養学部人文科学科文化人類学研究室（編）『人文科学科紀要第96輯 文化人類学研究報告6』：1-46.
- 大貫良夫, 加藤泰建
- 1991 「クントゥル・ワシの墓——ペルー北部山地の発掘調査から」『ラテンアメリカ研究年報』11：1-21.
- オートロフ, C. R. (井口欣也訳)
- 1989 「前インカ時代のかんがい用水路」『サイエンス日本版』2月号：89-97.
- Pozorski, Shelia.
- 1987 “Theocracy vs. Militarism: the Significance of the Casma Valley in Understanding Early State Formation,” in Haas, Jonathan, Shelia Pozorski and Thomas Pozorski (eds.), *The Origins and Development of the Andean State*: 15-30. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pozorski, Shelia and Thomas Pozorski.
- 1979 “An Early Subsistence Exchange System in the Moche Valley, Peru.” *Journal of Field Archaeology*. 6: 413-432.
- 1987 *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*. Iowa City: University of Iowa Press.
- Pozorski, Thomas.
- 1976 *Caballo Muerto: A Complex of Early Ceramic Sites in the Moche Valley*,

Peru. Ph. D. dissertation, University of Texas, Austin. University Microfilms, Ann Arbor.

Quilter, Jeffrey and Terry Stocker.

1983 "Subsistence Economies and the Origins of Andean Complex Societies." *American Anthropologist* 85: 545- 562.

サーリンズ, マーシャル(山内昶訳)

1984 『石器時代の経済学』 東京:法政大学出版局。

Seki, Yuji.

1994 "La Transformación de los Centros Ceremoniales del Período Formativo en la Cuenca de Cajamarca, Perú." In Millones, Luis y Yoshio Onuki (eds.), *El Mundo Ceremonial Andino*: 143-165. Lima: Editorial Horizonte.

関雄二

1995 「政治的な作物としてのトウモロコシ: アンデス形成期の食糧基盤を探る」古代オリエント博物館(編)『文明学原論』: 55-78, 東京: 山川出版社。

Shimada, Melody.

1985 "Continuities and Changes in Patterns of Faunal Resource Utilization: Formative through Cajamarca Periods." In Terada, Kazuo and Yoshio Onuki, *The Formative Period in the Cajamarca Basin, Peru: Excavations at Huacaloma and Layzón, 1982*: 289-310. Tokyo: University of Tokyo Press.

Tello, Jilio C.

1943 "Discovery of Chavín Culture in Perú." *American Antiquity* 9 (1): 135-160.

Terada, Kazuo and Yoshio Onuki.

1982 *Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979*. Tokyo: University of Tokyo Press.

Williams, Carlos.

1980 "Arquitectura y Urbanismo en el Antiguo Perú," in *Historia del Perú VIII*: 369- 585. Lima: Editorial Juan Mejía Baca.

Wing, Elizabeth S.

1972 "Appendix IV: Utilization of Animal Resources in the Peruvian Andes," in Izumi, Seiichi and Kazuo Terada (eds.), *Andes 4. Excavations at Kototh, Peru, 1963 and 1966*: 327-351. Tokyo: University of Tokyo Press.